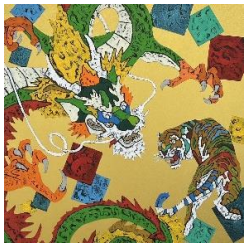
作家名	作品名	サイズ	素材	作品画像	価格
阿部ふみ	龍のうまれる空	21.5×27.0㎝	紙、オイル、鉛筆／額装込		¥44,000
漆原夏樹	ありふれた奇跡	6P （41.0×27.3㎝）	紙本彩色		¥220,000
大島真由美	良い子	6F （41.0×31.8㎝）	紙本彩色		¥154,000
狩野宏明	龍の頭上で数遊び	6M （24.2×41.0㎝）	パネル、白亜地、綿布、パネル		¥154,000
神戸智行	龍図	SMS （22.7×22.7㎝）	紙本彩色		¥308,000
北嶋勇佑	りゅうこず	6S	モノタイプ		¥110,000
佐々木怜央	スーパーノヴァ	22.0×16.8×14.0㎝	ガラス、金属箔、顔料		¥165,000

作家名	作品名	サイズ	素材	作品画像	価格
財田翔悟	たつ	4F （333×24.2㎝）	綿布、ピグメント、岩絵の具 アクリル絵の具、硫酸カルシウム、箔		¥82,500
寺内誠	Invisible Sound	6P （41.0×27.3㎝）	パネル、白亜地、綿布、パネル		¥181,500
野崎慎	幸めぐる	6S （41.0×41.0㎝）	和紙、箔、岩絵具 アクリル絵の具		¥165,000
福崎翼	風龍 WIND DRAGON	6P （27.3×41.0㎝）	紙、鉛筆／額装込		¥151,800
山内隆	瀑布図	29.5×9.7×2.0cm	大理石、漂流物 （採取地 / 千本松海岸 / 沼津市）		¥132,000

漆原夏樹　「ありふれた奇跡」

ありえないような黄金の景色の遠景に、何か超常の存在がいる…。
日々過ごす中でも、見えている位相を少しずらすと様々な奇跡が散らばっていることに気付く。それはたまたま起きた光の乱反射であったり、ただの勘違いだとしても、そこで見えた景色に救われることもあるのではないだろうか。
そのような日々のありふれた出来事を象徴する景色を描いた。

大島真由美 「良い子」

頑張っているきみ、
楽しんでいるきみ、
起きられないきみ、
良い子でいすぎたきみ、
家族が大切なきみ。
未来が待っているよ。

狩野宏明　「龍の頭上で数遊び」

山形県米沢市の笹野観音堂に施された龍の彫刻をモチーフとして、2 人の精霊が龍の頭上で交流する様子を描いた。
2 人の精霊を繋ぐ帯には、「ティティウス・ボーデの法則」と呼ばれる数式が描かれている。これは 18 世紀に提唱された法則で、太陽から各惑星までの距離を簡単な数列で表すことができるというものである。現在では科学的根拠を伴わない偶然の産物と見做されており、世界の見えない結びつきや偶然の一致を楽しむ人間の心理の象徴として描いた。
周囲の幾何学図形は、西洋の数学が導入される以前の日本で用いられていた「和算」と呼ばれる算術体系で使用された図形である。
日本の神社仏閣には、この和算を絵馬に記して奉納された「算額」がしばしば見られる。数学の問題が解けたことを神仏に感謝し、一層勉学に励むことを祈願して奉納されたものであり、日々学び続ける喜びの象徴として描いた。
画中の図形の円は５６個描かれており、ギャラリー広田美術の５５周年を記念するとともに、新たな未来へ向かう意味を込めた数とした。

北嶋勇佑　「りゅうこず」

龍虎（りゅうこ）は互いに優劣のない二人の強者の例えとして、その構図が注目されていますが、勇敢さや自信、躍動の象徴として、より強い色彩で描きたいと考え制作しました。
活力に満ち、ぶつかる間を金色で表現し、溢れ出るイメージです。
龍は空想上の生き物なので、実際にその姿形を見ることはできませんが、モデルの一端となっているワニやヘビからの感興、虎はその佇まいの印象を摺り込みました。

財田翔悟　「たつ」

干支に龍（辰）が含まれているのには違和感があります。唯一空想の動物であるからなのでしょう。
十二支の起源や由来は諸説ありますが、十二支は動物ではなく植物の様子を表す言葉であり、動物に当てはめたのはその概念を広めるために受け入れやすくするためだったそうです。従って漢字が特殊になっています。
音で当てはめた際にそれぞれの動物が決まったようですが、「辰」は元をたどると蜃気楼のシンであり、龍というわけではなかったとのこと。
「蜃」とはざっくりいうとハマグリの妖怪でそのものずばり、蜃気楼を見せる怪異。江戸の妖怪絵師である鳥山石燕の『今昔百鬼拾遺』にも出てくる比較的メジャーな妖怪です。
この蜃という妖怪の形状には龍型という説もあるため、転じて干支に龍が入ったようです。

やはり空想の生き物であるのでなんとなくその概念も曖昧で、幻想的です。
自分が龍というテーマを作品に落とし込む際にその「なんとなく」な空気を取り込みたいと考えました。
人物が被っている龍はなんとなく龍っぽい形状をしていますが、どこかそうとも言い切れないつぶれ具合を凹凸で表現しています。

寺内誠　「Invisible Sound」

今展覧会のテーマである「龍」から連想したのが、数年前にネットニュース等で話題になった、中国貴州省の村で起きた謎の怪音騒動についてでした。
その音は数日間に渡り、獣のうなり声のような重低音で山村に鳴り響き、「まるで龍の鳴き声のようだ」と注目を集め、ニュースを知った多くの人々が村に押し寄せました。インターネット上には、怪音とともに現地に群がる人々の様子が映し出された動画が複数アップされました。
音の原因は特定されないまま、さまざまな憶測（地下洞窟から漏れた音である説、天変地異の前触れ説、世界の週末説、等々）が飛び交いました。
いわゆるオカルト的なニュースではありましたが、私は当時、妙にその話題が気になってしまい、続報がないか度々ネットで検索していました。
しばらくして音の正体は、専門家らが調査した結果「ウズラの一種の鳴き声が山に反響したもの」であるというニュースが流れました。しかしその情報もまた、騒動を収めるためのフェイクだという声も聞かれ、真相はよくわからないまま話題は埋もれていきました。

実際のところ、本当に調査の通りだったのかもしれないし、何か別の自然現象だったのかもしれません。しかし、ネット上にアップされたいくつかの動画（それ自体の真偽もまた不明ですが）からは、何かしらの見えない存在や、理解できない事象が起こっているという、ある種の期待感のようなものが伝わってきました。私は何度も映像を見ては思いを巡らし、わくわくしていました。

本作は、その村に群がり謎の音を聞く人々のネット画像を参考にして制作したものです。
描きながら、そもそも村の大地自体が龍の鱗のようにも見える気がしていました。

野崎慎　「幸めぐる」

はじまりは小さな粒
集まり、繋がり、かたちづくる
見えるものも、見えないものも
この大きなセカイをつくる
その一つ一つがこの大きな宙と
つながり、共鳴し
幸せはめぐりめぐっていく

福崎翼　「風龍」

ラクダの鼻、猫の目、鹿の角、蛇の身体。
幻獣とは言われているけれど、実はとても具象的なイメージの集合。
身近な動物も雲や風に隠れて現れたなら、龍のような不思議な存在に見えることもあるだろうなと思う。

山内隆　「瀑布図」

久々にモザイク技法で作品の制作をしたきっかけは、東京都美術館（上野）の「永遠の ローマ展」で印象的なモザイクを見つけたからだった。龍のフォルムを石に置き換えた 後、なんとなく滝のイメージが浮かびあがったことから「瀑布図」と題してみた。支持体 は沼津の千本松海岸で採取した漂流物で、モザイク部分は様々な大理石だが、一部に伊豆 市の筏場のわさび田（山神社近辺）で採取した黒曜石を使用した。上野も伊豆市も沼津も 作品の構想中にたまたま出かけた土地であり、龍の伝承とは無関係だが、伊豆市ではあち こちの岩肌から水が湧き出ている様子が興味深かった。